

## 歌集『ウォーターリリー』の詩精神 三沢左右

十一月号の本欄でも触れた川野里子歌集『ウォーターリリー』だが、今号でもいままじ鑑賞を深めたい。まずは二〇一九年刊行の川野の歌集『欲待』に触れる。

母死なすことを決めたるわがあたま気づ  
けば母が撫でてゐるなり

率直に言えば『欲待』を最初に読んだとき、警戒するところがあった。あまりにも胸に迫ったからである。一冊は、延命治療を断り、母の死を看取るといふ冒頭から、生前の母の姿に遡る。逆編年体の構成や的確な詞書など、読者に向けてドラマ的な技術を駆使しているのではないかと。しかし、読み返すうちに警戒は解けた。「作者は、歌にすることでもう一度傷ついている」と感じたのだ。痛みを安易な形で慰藉せず、葛藤を単純な一つの物語や正義に回収もしない。信頼できる作者だと感じた。「詩」とは、物語になる少し手前で差し出されるものではないかと、私は思う。

さて、『ウォーターリリー』だ。社会詠、戦争詠など多彩なテーマが登場する本作は、全編を通して物語になる前の「詩」がある。

あの川に兄が浮かんでこの沼に父が浮かんで 睡蓮が咲いた

ブレーキとアクセル踏みまちがへたといふ日本にっぽんがそしてある老人が

ウォーターリリーウォーターリリーウォーターリリー そこにゐますね

一、二首目はベトナムを訪れた体験を詠んだ冒頭の連作「ウォーターリリー」から。一首目、ベトナム戦争の死者をイメージしたと思われる兄・父だが、作者自身の親類縁者に重なる、抽象的な「兄・父」とも感じる。後半で舞台を日本に移す連作だが、二首目で詠まれるのは池袋で起こった痛ましい交通事故のことだろう。しかし作者は「ある老人」の前に「日本」を置き、大きな社会に接続することで、痛みや悲しみを矮小化せず、自分のこととして傷つき直すのだ。ここに、「詩」としての社会詠のあり方を見る気がする。

連作中「ウォーターリリー」の語が象徴的に繰り返されるが、これはベトナムを象徴すると同時に、歌集全体の象徴でもある。三首目は歌集最後の歌。最終ページには三つの歌

が置かれ、すべてに「ウォーターリリー」が詠み込まれる。連作単位を超えてこの語が随所に登場することで、一冊に作者の詩精神が満ち、基調が整う。長編の詩に通じるリフレインの技法は、個々の出来事を、自身を含む世界に繋げることで、痛みを自分のこととする覚悟を持つて選ばれたともいえよう。

ここに。降りて。ここで。消えた。人が  
ゐるなり 市電が停まる

(かうやつて)ここを合はせてかうやつて  
ここを畳んでこころのやうに)

「鶴の折り方」と題された連作から二首を引いた。広島を訪れる一連だが、随所に(一)に入れた「鶴の折り方」が挿入される。この「折り方」も、実際の折り方の描写ではなく、象徴性を帯びる。詩的表現を駆使して、川野作品は普遍的な射程を獲得する。

現代の我々は、コロナ禍や震災について専門家や専門機関から精緻なデータや高精度な写真、映像を手に入れることができる。また、識者の分析や考察も論文などの形で発表される。では詩の力はどこにあるのだろうか。個々の出来事を自分のこととして傷つき、安易な結論に飛びつかずに、痛みそのものを言葉にしていふところに詩の力は生まれるのではないかと、私は思う。